

## C05a 国立天文台のアーカイブ活動

中桐正夫（国立天文台）

国立天文台が設立されたのは、1988年7月1日であるが、前身の一つである東京大学東京天文台は1888年に設立され、同じく前身の一つである緯度観測所は臨時緯度観測所として1899年に設立され、また前身の一つである名古屋大学空電研究所が設立されたのは1949年であり、その第3部門（太陽電波部門）が国立天文台の前身の一つになった。国立天文台の前身の一つである東京大学東京天文台は、1878年に東京大学観象台として発足しているから、東京大学関係者から見れば国立天文台は135年の歴史がある。

国立天文台の前身の各研究機関も日本の天文学研究の中核を担ってきた機関であり、最先端の天文学研究に最大限の力を注ぎ研究を進めてきた。その一方、観測を支え役目を終えた観測機器、測定機器、天体写真乾板を初めとする機器類、資料などの保存には熱心であったとは言えない。

2008年に国立天文台天文情報センターにアーカイブ室が立ち上がり、国立天文台に遺された歴史的にも貴重な観測機器類、測定機類の収集、整備、保存を始め、1880年のドイツ製レプソルド子午儀を発掘、整備し、国の重要文化財に指定を受ける快挙もあった。また国立天文台から散逸した貴重な望遠鏡を回収し、復元、整備、展示を行うなど機器類のアーカイブを進めてきた。また、1945年2月の東京天文台本館の火災で失われたと思われていた戦前の写真乾板を発見し、日本人として初めて小惑星を発見した1900年3月6日の写真乾板を発見するなどの成果を上げている。

2013年には、新たに7件の歴史的な建造物を登録有形文化財として申請し、文化庁文化審議会の議を経て登録が文部科学大臣へ答申されるなどの成果を上げている。